

# 世界へ。



## 外務省については

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1  
Tel:03-3580-3311(代)(内線:2197)  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

## 外務省

MINISTRY OF FOREIGN AFFAIRS



MINISTRY OF FOREIGN AFFAIRS

# 世界史を描く最前線で

## 日本の歴史を紡ぐ、 未来を創る

外務省は、1869年（明治2年）に創設されて以降、  
名称を変えることなく現在まで、常に時代の鼓動を最前線で感じながら、  
外交を通して日本の歴史を紡いできました。

日本の行く末は、国際社会全体の未来と分かťことなく結びついています。

今、大きな地殻変動の直中にある世界で、  
外交の果たす役割はかつてなく大きくなっています。  
その目的とは、国際社会の一員としての責任を果たしつつ、  
日本の安全と繁栄を確保し、国民の生命と財産を守ること。  
その原動力とは、職員一人ひとりの情熱と使命感、それを支える知性、  
人間としてのタフさと誠実さ、更には、あくなき向上心。

外交は、現在進行形で世界史を描き続ける営みです。  
「日本の歴史を紡ぐ、未来を創る」外務省という舞台で  
正解のない挑戦とまだ見ぬ世界が、あなたを待っています。



メッセージ 01

世界を舞台に、  
日本の未来を創る 03

日本の安全と  
繁栄を守るために 05

外交の最前線で  
日本を体現する 11

キャリアパス 15

官邸／内閣官房で  
活躍する外務省職員たち 25

「人」を育てる研修制度 27

ワークライフバランス 29

若手職員座談会 31

外務省Q&A・採用情報 33  
採用担当からのメッセージ 34



# 世界を舞台に、日本の未来を創る

## 国際社会における日本国及び 日本国民の利益の増進のために

現在、私たちを取り巻く国際社会は時代を画する変化の中にあります。普遍的価値や原則、戦後確立されてきた国際秩序が様々な挑戦にさらされ、日本を取り巻く現実が厳しさと不確実性を増しています。同時に、グローバル化と技術革新は私たちに新たなチャンスとリスクを生み出しています。このように激動する国際社会の中で、今、私たちが当たり前のように享受している安全と繁栄を守り、未来につなげるため、外務省は、外交政策を企画・立案し、世界中に張り巡らせた在外公館のネットワークを通じて外交の最前線で日々活動しています。

### 外務省の任務 ～5つの取組～

1. 日本と国際社会の平和と安定の確保
2. 日本経済の成長と繁栄の追求
3. 開発協力 ～世界の様々な課題の解決への取組～
4. 日本についての理解の促進
5. 「国民と共にある外交」の推進

### 外務省の成り立ち

「本省」と「在外公館」で構成される外務省

外務省は、東京・霞が関にある「外務本省」と、世界154か国に置かれている「在外公館」(大使館・総領事館・政府代表部)で構成されています。外務本省は、外交政策を企画・立案して日本外交を推進し、在外公館では、本省の意向を受けつつ、精力的に様々な外交活動に取り組んでいます。

■ 職員合計:約6,500名

#### 大使館

通常、相手国の首都に置かれ、日本政府を代表して相手国政府との交渉や連絡を行います。また、政治・経済その他の情報収集・分析、日本を正しく理解してもらうための広報文化活動、邦人の生命・財産の保護なども行います。

#### 総領事館

通常、首都とは別の主要都市に置かれ、その地方の在留邦人の生命・財産保護、通商問題の処理、政治・経済その他の情報収集・広報文化活動などを行います。

#### 政府代表部

日本政府を代表し、国際機関に対して外交活動を行う機関。2022年度末現在、国際連合日本政府代表部(ニューヨーク)、在ウィーン国際機関日本政府代表部、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部など、10の政府代表部があります。

### 外務省の組織と機構



## 外務本省

東京・霞が関  
職員:約2,900名

外交政策の  
企画・立案など

## 在外公館

世界154か国・231公館  
(大使館・総領事館・代表部)  
職員:約3,600名

情報収集・分析、  
外交政策の実施など

指示

報告



### 法律上の外務省の任務

外務省の任務は、  
外務省設置法で以下のように  
規定されています。

「外務省は、平和で安全な国際社会の維持に寄与するとともに主体的かつ積極的な取組を通じて良好な国際環境の整備を図ること並びに調和ある対外関係を維持し発展させつつ、国際社会における日本国及び日本国民の利益の増進を図ることを任務とする。」(第3条)

# 日本の安全と繁栄を守るために本省



## 総合外交政策

### ■本省

総合外交政策局総務課  
首席事務官

### 中西 勇介

2004年 入省  
2012年 国際連合日本政府代表部 一等書記官  
2014年 国際法局条約課 課長補佐  
2017年 大臣官房人事課 課長補佐  
2019年 欧州局ロシア課 首席事務官  
2021年 現職

## 変容する国際社会の中で日本外交の地平を切り拓く

### 変容する国際社会の中での 日本外交の舵取り

国際社会は今、大きな変革期を迎えています。私がこの部署に着任するや否や直面したのがアフガニスタンにおけるイスラム主義組織タリバーンによる首都カブールの制圧でした。カブール陥落は、国際社会に衝撃を与え、この地域における各国のバランスを揺るがすこととなりました。その後直面したのが、ロシアによるウクライナ侵略です。これまでの平和と安定を支えてきた国際秩序の根幹を揺るがす事態として、国際社会を震撼させました。このように変容する国際社会の中で、外交をいかに展開するのか、外交ツールをどう組み合わせ、アウトプットを最大化するか、外務省の総合力をいかに発揮するのか。そのような問題意識の下、日々直面する外交課題への対応の総合調整、総合的な外交政策の企画・立案を行っているのが私のいる部署です。

折しも2023年は、日本がG7議長国を務め、また国連安全保障理事会の非常任理事国となります。歴史的転換点に差し掛かる国際社会において、日本の国益を守り、平和で安定した国際社会の実現のために、外務省として英知を結集し、新たな歴史を切り拓くべく外交手腕を発揮する年となります。

### 常に新たな挑戦、出会い、刺激、 学びのある職場

外務省で扱う外交政策や課題は、安全保障政策から地球

規模課題、「自由で開かれたインド太平洋」の実現など幅広く、その対応には、刻一刻と変わる国際情勢に機敏かつ柔軟に反応しつつ、異なる歴史、文化、価値観を有する相手と向き合う必要があります。その中で国益を守り抜くには、相手国との厳しいやり取りが必要となりますが、それだけ外交という仕事にはやりがいがあります。私もこれまでアフリカ、国連、ロシアや様々な条約交渉などに携わってきましたが、常に新たな挑戦、出会い、刺激、学びがこの職場にはあり、自分を磨き続けることができる魅力あふれる仕事です。



提供:内閣広報室

#### 学生みなさんへ Message

#### 人として、組織としての「総合力」の発揮

ここ数年、新型コロナの蔓延により、対面での協議や移動が制限され、これまでの方法に囚われない発想で外交を進める必要に迫られました。変容する国際社会において、いつ何が起きるか分かりません。ただ、いかなる状況下でも国益を守るには何が最善かを考え抜き、柔軟に、粘り強く課題に取り組む力が求められます。そういう一人ひとりの力、それを支えるチームワークの「総合力」が日本の外交を支えています。皆さんと共に日本外交を支え、新たな地平を切り拓いていきたいと思っています。

自由で開かれたインド太平洋についての詳細はこちらから▶



## 安全保障

### ■本省

総合外交政策局安全保障政策課  
首席事務官

### 村本 千晶

2006年 入省  
2015年 アジア大洋州局中国・モンゴル第一課 課長補佐  
2017年 経済局政策課 課長補佐  
2019年 南部アジア部南西アジア課 首席事務官  
2021年 現職

## 長期的な課題と目前の問題にいかに取り組むか

### 急速な安保環境の変化 長期的な戦略の重要性

2022年、国家安全保障局や防衛省等の関係省庁と連携し、新たな国家安全保障戦略等の策定に約1年取り組みました。スピード感が重視される仕事も多い中、これからの日本がどのような方向に進むべきかを、長期的な視点で議論する業務に携わることができたことは外務省人生の中でも得がたい経験でした。

国際情勢や安全保障環境は絶えず変化していくものであり、これらを踏まえた外交政策の遂行が必要です。他の国との向き合い方はもちろんのこと、自由な議論を行い新たな仕組みを作ったりと、形となった成果を目にした時は感慨深いものがありました。また日々の危機管理対応も重要な業務の一つです。休日・深夜早朝を問わず連絡を受けることも多く、緊張感のある毎日ですが、様々な業務に取り組むことができ、やりがいのある仕事です。

### 個人の総合力と組織力

同じ省内でも担当する業務が違えば「国益」を実現するための考え方・アプローチは様々です。以前いた課では、数年以上決着がついていなかった案件について、他の課の担当と議論を戦わせながら解決策をなんとかひねり出しました。「外務省は懐が深い」と他の省庁の方から言われるほど、様々なバックグラウンドを持った同僚がいます。このよ

うな環境の中で、クリエイティブな政策を組織として作り上げていく過程は苦しさよりも楽しさのほうが多いものです。

外交はゼロサムゲームではありませんが、守るべき点は確保しなければなりません。外務省という組織の中で作り上げた政策を、各国の関係者との間で互いの立場の違いを越えて調整し、日本の平和と繁栄の実現に取り組んでいきたいと考えています。



提供:内閣広報室

#### 学生みなさんへ Message

#### 幅広い業務と自身の成長

大学時代の留学を終え、進路を迷っていた時にアドバイスをくれた当時の大学の教官は、外務省の魅力として幅広い業務内容を挙げてくださいました。その言葉どおり、これまで多くの新たな挑戦がありましたが、一つ一つの山を越え着実に自分の経験値が増す喜びを感じています。外務省は大きな責任も抱えますが、知的好奇心を満たしながら成長できる魅力的な職場です。

日本の安全保障政策についての詳細はこちらから▶







## 経済外交・G7／G20

## | 本省

経済局政策課  
課長補佐

菊地 理美

2009年 入省  
2013年 在ミャンマー大使館 二等書記官  
2015年 アフリカ部アフリカ第一課 課長補佐  
2017年 経済局経済安全保障課 課長補佐  
2019年 国際協力局国別開発協力第三課 課長補佐  
2021年 現職

## 国際社会の転換点へG7・G20の枠組からアプローチ

| 活発化する首脳外交と  
スコープの広がり

G7とG20の首脳プロセスを担当しています。年に一度のサミットに向けた対応が主な業務ですが、新型コロナを契機として近年は首脳テレビ会議なども行われるようになり、年間を通じて様々な動きがあります。

G7とG20はいずれも経済危機への緊急対応のため発足しましたが、現在のG7では世界経済に加え、政治・安全保障、途上国開発、環境・気候変動や国際保健といった地球規模課題、ジェンダーなど、幅広い課題が取り扱われています。G20においても議論の裾野の広がりが見られます。日々のニュースの多くを「自分事」として捉え、日本としての対応を考えて具体化することのできる、刺激に満ちた仕事です。

| G7日本議長年には  
チームワークで臨む

2023年は日本がG7議長国を務めています。G7では、国際情勢に応じて柔軟に議題を設定でき、また成果文書も議長国が中心となって作成するので、議長国の役割と責任は非常に大きなものです。

ロシアによるウクライナ侵略を受け、G7の結束は一層強化されました。国際社会が多くの難題に直面し、多極化が進む激動の時代に、G7がいかにアプローチできるかにつ

いて、広島サミットに向け集中的に議論を進めています。日本の国益も考えつつ、議長国としてバランスのとれた意義ある成果を出す上では、総理を支える「シェルパ」の下にある私のチームだけでなく、省内外の関係部局や他のG7メンバーとのチームワークも非常に重要だと感じる日々です。



## 学生のみなさんへ Message

## 視野を広げ、視座を高める仕事

私は途上国開発などに関心があって外務省に入りましたが、ここでの様々な業務は、自分の視野を広げ、視座を高めてくれたと感じています。今は社会課題への取り組み方も色々とありますが、議論のスケールと取組のインパクトの大きさという点では、外務省で働くことの魅力は引き続き大きいと思います。チャレンジしてみると、新しい世界が開けるかもしれません。

G7広島サミットについての詳細はこちらから▶



## 国際協力

## | 本省

国際協力局政策課  
課長補佐

野口 有佑美

2013年 入省  
2015年 在フランス大使館 外交官補(在外研修)  
2017年 在セネガル大使館 二等書記官  
2019年 総合外交政策局国連企画調整課 課長補佐  
2021年 現職

## 時代に即した国際協力の在り方を考える

| 政府開発援助(ODA)  
質・量の拡充に向けて

現在、国際協力局政策課で政府開発援助(ODA)予算に関する業務を担当しています。ODAは、新型コロナやウクライナ情勢等、私たちが直面する様々な危機に対応するとともに、SDGsの達成に向けた取組を推進するにあたり、最も重要な外交ツールの一つであり、その役割は一層増えています。一方で、政府の一般会計ODA予算を見ると、1997年のピーク時に比べ、約半分まで落ちているという状況があります。ODAを質・量ともに拡充するため、ODAが相手国の経済社会開発に資すると同時に、その援助が「自由で開かれたインド太平洋」等の外交政策の推進や日本企業の海外展開といった国益にかなうものであることについて、対外的な説明責任をしっかりと果たしていきたいと考えています。

| 国際情勢の時流を捉え  
自分の仕事に繋げる

外務省の仕事においては、激動の国際情勢の中で、その時流をいかに捉えて自分の仕事に落とし込むか、ということが求められます。前職の国連企画調整課では、国連総会における総理の一般討論演説の骨子作成を担当しましたが、日本外交全体を俯瞰しつつ、現在の趨勢において、国連という場でどのような発言をすれば日本のプレゼンス向

上に繋がるかを考えるという、大変やりがいのある仕事に恵まれました。2022年末現在、国際協力局政策課でも、開発協力大綱の改定という作業が進んでいます。これまでの日本の実績やODAを巡る潮流を踏まえつつ、開発協力を時代に即した形にアップデートする過程は、チャレンジングで学ぶことの多い日々です。



## 学生のみなさんへ Message

## 求む!夢中になれるパワー

私は大学時代まで体育会でバスケットボールに打ち込んでいました。勉強では大分遅れを取りましたが、好きなことに情熱をかけた学生生活に後悔はありませんし、留学先のフランスやその後のセネガル勤務においても、バスケットを通じたコミュニケーションが役立ちました。今夢中になれることに全力を注ぐ皆さん、ぜひそのパワーを外交という世界でも発揮してみてください。

ODA(政府開発援助)トップページはこちらから▶







## 広報文化

### ■本省

外務報道官・広報文化組織

国際報道官室 課長補佐

## 高柳 啓太

2015年 入省

北米局日米安全保障条約課 事務官

2017年 在米国大使館 外交官補(在外研修)

2019年 在中国大使館 二等書記官

2021年 現職

## 世論を無視して外交は展開できない

### ■海外メディアを相手に

どの国も自国の世論を無視して外交は展開できません。民主主義国家はもちろんのこと、選挙のない大国でも同じです。そのため、日本が外交政策を有利に進める上で、他国の世論、ひいては国際世論を味方につけること、最低限、誤解されないことが鍵になります。

私のいる部署では、国際世論に大きな影響力を持つ海外メディアを相手に日々試行錯誤しています。記者会見やブリーフィングを通じて正確な情報を迅速に発信し、世界中の報道ぶりを通して国際世論の潮流を分析します。ときには総理や大臣の寄稿・インタビューを通じて一石を投げ、海外から記者を日本に招いては一緒に石を投げてくれる仲間を増やします。「言わぬが花」といった美学は、残念ながら国際社会では通用しません。歴史認識、領土、環境、人権等、日本が国際場裏で劣勢に立たされる局面では、日本の立場・取組について丁寧な説明を繰り返します。

ただ、一方的に言いたいことを言うだけでは響きません。国内の理屈ばかりを優先して、独り善がりな発信になってはむしろ逆効果です。一つ一つのメディア、一人ひとりの記者にも考えがあり、事情も異なります。効果的な発信をするのは想像以上に難しいことですが、その分やりがいがあります。

### ■数年毎に別世界

外務省では数年毎に、国際秩序観が180度異なる国、優先するものが180度異なる部署に身を置くことも珍しくありません。そうして初めて自分の見方がいかに平面的であったかを痛感します。少しでも自分は変わったなと思える瞬間は幸せですし、本来はそう頻繁にあるものでもありませんが、外交の世界はその機会で溢れています。



### 学生のみなさんへ Message

#### 懐の深い組織

外務省には多様な人材を受け入れる懐の深さがあります。仕事の分野が多岐にわたっている上に、出身大学、専攻分野、海外経験の有無等で選考されるほど外交の仕事は単純ではありませんし、この国にも余裕はありません。また、若手であっても、一旦外に出れば国を体現する者として見られるからこそ、単に自分を高めるため以上に自己研鑽を積むことができるのはこの職場の魅力です。

「日本の外交政策に関する動画」ページはこちらから▶



## 国際法

### ■本省

国際法局国際法課

首席事務官

## 秋山 卓也

2009年 入省

2013年 在フィリピン大使館 二等書記官

2015年 アジア大洋州局北東アジア課 課長補佐

2017年 大臣官房会計課 課長補佐

2019年 国際法局国際法課 課長補佐

2022年 現職(同 首席事務官)

## 国際法を武器に外交政策に貢献

### ■政策部局に法的助言 自由かつ徹底的に議論

国際法課では、国際法の観点から政策部局に法的助言を提供しています。この法的助言は、日本が国際法を遵守することを確保することに加え(これ自体も極めて重要です)、日本の主張に普遍的な説得力を持たせ、相手が反論する芽を事前に摘む役割を果たします。能動的な「リーガル・サービス」が国際法課の腕の見せどころです。このためには、膨大な資料を読み解く粘り強さ、強固な法的主張を作り出す論理的思考、時には先例をも見直す批判的精神、外交の大きな方向性を的確に捉える俯瞰的視野が必要です。国際法実務はチャレンジングで、自分の未熟さを痛感する場面もありますが、国際法局には、省内外から多種多様な問題が持ち込まれ、自由闊達かつ徹底的に議論することを通じ、日々成長の実感を得られる刺激的な環境があります。

### ■広くて深い国際法 専門家としての自覚

他国のカウンターパートと話していると、国際法の実務家は、国際法局や一部の在外公館のみで集中的にキャリアを積む国も多いことに気がきます。こうした相手と対等に議論することは容易ではありませんが、政策部局の現場を肌で理解しているからこそできる実践的な法的助言で付加価値

を出せるよう常に努力しています。同時に、国際法局の職員は担当分野の専門家です。私は海洋法、その後は武力の行使・自衛権等を担当しました。担当分野を深掘りするのに近道はありませんが、自分なりの方法を体得できると、他分野を学ぶ際にも応用できます。専門家として意見を述べることは時に重圧も伴いますが、自分の仕事と日本の政策決定が結び付いている実感を得られる瞬間の連続です。



ICC-CPI



UN Photo/CJ-CLJ Frank van Beek

### 学生のみなさんへ Message

#### 「生きている」国際法を使って

近代国際法は西欧で発展しましたが、今も成長を続けています。国連国際法委員会では、「武力紛争に関連する環境の保護」、「国際法に関連する海面上昇」等、変容する国際情勢に応じた新たな課題が議論され、日本も貢献しています。国際法が「生きている」ことを実感させられます。国際法を活用した「グローバル・サウス」との連携も重要課題です。

国際社会における法の支配についての詳細はこちらから▶





# 外交の最前線で日本を体現する

# 在外公館



## 国際連合

### 在外公館

国際連合日本政府代表部  
参事官

## 長野 俊介

2007年 入省  
2015年 国際協力局政策課 課長補佐  
2017年 北米局北米第一課 課長補佐  
2020年 大臣官房総務課 総括補佐  
兼 危機管理調整室 首席事務官  
兼 業務合理化推進室 首席事務官  
2022年 現職

## 国際連合（国連）で日本を代表する誇りと責任

### 国連という

### 「世界」で奮闘する

国連は193か国が一堂に会する世界最大のフォーラムであり、いわば国際社会の縮図です。総会決議は国際社会の総意としての権威と正統性を持ち、安保理の決定は加盟国を法的・政治的に拘束する重みがあります。それゆえ各国は国連で、国益をかけ熾烈な外交を繰り広げています。外交とは国際政治であり、本音と建前、短期的利益と中長期利益といった様々なトレードオフを使い分け、駆け引き（ギブアンドテイク）を通じて国益を最大化する試みです。その際、①ルール（国際法や国連独自の決まり等）を熟知した上で、②実際の国力を背景に、③外交官としての個人の能力をフル活用することが求められます。私自身、日々力不足を痛感しつつも、上司や仲間の協力も得ながら奮闘しています。

### 2023-2024年

### 安保理に復帰する

国連代表部の仕事は、相手国の数が桁外れに多く、世界のどこで起きる事態でも安保理を中心に対応が必要となることが特徴です。ひとたび弾道ミサイル発射や武力侵攻、クーデター等が発生すれば、一気に局面が変わります。想定外の事態に際し、限られた時間と手段で目指すべき最善策は何か。安穏とはほど遠いスリリングでタフな毎

日は、学生時代とは対照的です。2023年1月、日本は安保理に復帰しました。感傷に浸る間もなく1月にいきなり議長となり、怒濤の日々が始まっています。外務省では、困難な仕事の報酬が更に困難な仕事ということも珍しくありませんが、期待や信頼の裏返しと解釈すれば、苦労はやり甲斐に変わるでしょう。人生一度きり。日本のため、世界のために働く誇りと責任を胸に、精一杯頑張りたいと思います。



### 学生のみなさんへ Message

### 国際関係≒人間関係？

「国」を代表するのは結局は「人」であり、国の立場はありつつも、個人的な人間関係なくして外交はできません。国連で出会う外交官は見た目も文化も母語も経歴もバラバラですが、人間的魅力に溢れた人が多く、刺激になります。学生時代の趣味や経験（私はお酒（笑））も関係構築にきつと役立ちますので、自分なりの興味・関心を深め、充実した日々をお過ごしください！

職員の現地動画はこちらから▶



## 米国

### 在外公館

在米国大使館  
一等書記官

## 小池 萌

2010年 入省  
2014年 OECD日本政府代表部 二等書記官  
2016年 アフリカ部アフリカ第一課 事務官  
2017年 アフリカ部アフリカ第二課 主査  
2018年 国際法局経済条約課 課長補佐  
2020年 現職

## 相手の立場や考えに対する深い理解が全ての基本

### 成熟した同盟関係と

### 日本への期待

私は在米国日本大使館の広報文化班で、政策発信や文化交流を担当しています。日本にとって日米同盟が外交の基軸であることは数十年来変わらぬ基本方針ですが、米国にとっても、中期的課題が中国との戦略的競争であることが党派を超えてコンセンサスとなる中で、インド太平洋地域への関与に当たって最重要パートナーとして、対日重視の姿勢が強まっています。期待を裏付けする日本の強みや貢献をいかに米国政府関係者や有識者の感性に訴える形で発信するか、また、より広い一般市民に対しては対日関心をいかに喚起するか、外部の有識者等とも議論しながら施策を練って実施しています。米国世論に対する広報効果の測定は難しく試行錯誤の繰り返しですが、思いを込めた発信に対して意図した反応が得られた時、やりがいを感じます。

### 外交の「現場」で

### 果たすべき役割

情報技術の発達により誰でもあらゆる情報が即時に入手でき、コロナ禍を経て遠隔のコミュニケーションが一般化した今、在外職員として、最前線で取る情報の確度や鮮度、密な人脈形成や信頼関係の構築がより厳しく問われているように感じます。表明された立場の裏にある背景やニュア

スを読み取り、相手の理解・納得が得られる形で日本の立場を伝えること。これは交渉にも対外発信にも共通する精髓で、ターゲットがいかなる層であっても、理解を得るためには、まずは相手をよく理解することが重要だと日々実感しています。こうした「現場感覚」を養う中で、自国の政策や歴史・文化に対しても多角的な視野が開け、新たな発見が得られるのも、在外で経験を積む面白味の一つです。



### 学生のみなさんへ Message

### 悲観は感情、楽観は意志

私は困難に直面した時や重大な決断をする際、哲学者アランによるこの言葉を想起しています。進路選択は勇気のいる決断ですが、あれこれ心配するより、純粋な想いや熱意が素直に向かうところへ飛び込んでみてください。私は日本人であることに誇りを持てるような国づくりに貢献したいと外務省を選び、今でもこの想いに嘘なく仕事が出来て幸せに感じています。

職員の現地動画はこちらから▶







## アフリカ

### 在外公館

在コートジボワール大使館

二等書記官

## 岡松 野花

2017年 入省

国際協力局国別開発協力第一課 事務官

2019年 在フランス大使館 外交官補(在外研修)

2021年 現職

## 新たな発見・出会いを糧に

### 平和からの発展

#### コートジボワール

コートジボワールは、独立後は「象牙の奇跡」と呼ばれるほど急速な経済発展を遂げたものの、その後幾度もの内戦を経験しました。安定を取り戻した現在は、平和の定着に努めながらも、仏語圏西アフリカの経済中心国として存在感を発揮しています。日本からは遠く離れた国、サッカーの試合で聞いたことがあるくらい？という方が多いかもしれませんが、実はカカオやカシューナッツの生産量世界一位の国です。私にとっては、人生で初めて訪れたアフリカの国。大使館が所在するアビジャン中心部には高層ビルが立ち並び、赴任のために到着した際の第一印象は、「都会！」でした。発展段階にある経済は動きが活発で、人々の活気や街の変化を通じて、国が成長していく様子がはっきりと見えます。生活で不便なこともありますが、このように未来への可能性・前向きなエネルギーを感じ取れることは、発展途上国に駐在する楽しみの一つであるように思います。

### 相手の心に届ける

#### オーダーメイドのメッセージ

当館は、ニジェールとトーゴも管轄しています。近隣国で多少の共通点はありますが、抱えている課題も異なり、文化・国民性も多様です。相手国政府に対し日本の声を効果

的に届けていくためには、各国の考え方への理解を深め、オーダーメイドのアプローチを取る必要があります。外交官として勤務する中で、自分の国における「常識」を相手に押し付けられないこと、個々人との信頼関係構築が肝であることを改めて学びました。どんな言葉で伝えたら相手の心にメッセージを響かせることができるか、日本に対する信頼を更に深めてもらえるか、日々模索しながら仕事をしています。



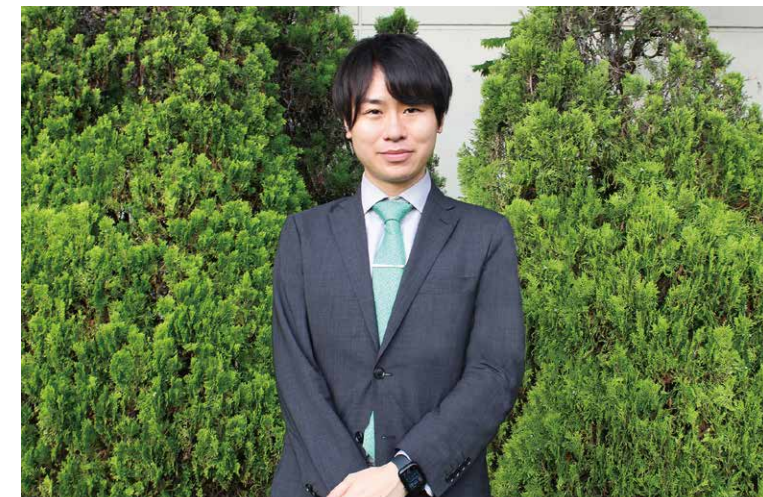
日本大使柔道杯@コートジボワール

#### 学生のみなさんへ Message

#### 「知らない」を「楽しい!」に

外務省は、多様な経験を積むことができる職場です。私は、東京では東南アジアのODAを、現在はアフリカで政治、広報文化、領事業務等を担当しています。入省して6年目ですが、知見がなかった分野に挑戦したり、自分が知らなかった世界の扉を開ける機会は沢山ありましたし、今後もあると思っています。生活の変化を好む私にとっては、その点が特に魅力と感じます。

職員の現地動画はこちらから▶



## 中南米

### 在外公館

在ペルー大使館

二等書記官

## 福留 健太

2017年 入省

地球規模課題審議官組織地球規模課題総括課 事務官

2019年 在スペイン大使館 外交官補(在外研修)

2021年 現職

## 任国を好きになる姿勢が、あらゆる外交活動の原動力になる

### ラテンアメリカ最古の友好関係の

#### 歴史を築く、日本の古くからの友人

私は日本から15,000km以上、地球のほぼ反対側に位置する南米ペルーに赴任しています。ペルーと聞いてあまりイメージが湧かない方もいるかもしれませんが、多くの魅力に溢れた素敵な国です。インカ帝国の遺跡マチュピチュ、地上絵で有名なナスカといった人気の観光地を有し、世界的業界誌で「世界で最も美食を楽しめる国」として21年まで9年連続最優秀賞に輝く等、美食大国としても確固たる地位を築いています。また、ペルーは世界3位の日系人口を誇る他、日本が中南米で最初に国交を樹立した国でもあり、実は私たちにとって縁の深い存在です。かかる経緯から友好関係を有する両国は、2023年に外交関係樹立150周年を迎えます。この時期にペルーに赴任した幸運に感謝しつつ、先人の日本人・日系人が長い年月をかけて築いてきた日本への信頼や絆を未来世代に継承していくという想いで、周年事業の準備に携わっています。

### 外交の最前線から

#### 本省の政策決定を支える

私が担当する政務班では、ペルー内政・外交の情報収集と政府関係者との関係構築・折衝が仕事の中心です。ペルー政治は過去6年に6人もの大統領が誕生する等、内政の混乱期にあると言えます。他方で、このような難しい時期

だからこそ、大使館が先頭に立って果たす役割は特に大きいと考えており、在留邦人や旅行者をはじめとした日本人の方々の生活と安全をお守りする上で、また本省が適切な政策を決定する上で、迅速かつ正確な内政フォローを心がけています。激動するペルー政治に翻弄されてしまう時もありますが、上司や同僚の助けを得ながら日々外交活動に取り組んでいます。



#### 学生のみなさんへ Message

#### 外務省でしか得られない経験を

日々変動する国際社会において傍観者ではなく、当事者として直接関わることは大きな責任を伴うものであり、時には大変なこともあります。ただ同時に「ここでしか見えない景色」が外務省にはあります。外交には政治や経済だけでなく、とても広大なフィールドが展開されており、そこでの挑戦や学びは外務省だからこそ得られる唯一の経験だと実感しています。

職員の現地動画はこちらから▶





# Career Path

## 私の現在地

外交が「人」を育て、「人」が 外交を支える。

### 外交は総合力

### 個々人のチャレンジや創意工夫が必ず活かされる舞台



外務報道官

小野 日子

(1988年入省)

35 年目

海外生活はおろか、引っ越しすらしたことのない私が外務省入省を目指したのは35年以上前になります。女性でも男性と同じように海外研修の機会が与えられたことや、大学の先輩である職員の方々が皆、それぞれの担当分野について目を輝かせながら熱く語ってくださったのも挑戦してみようと思った大きな要因でした。以来、地球環境問題に対応するルール作りから、日本のODAの方針策定やアジア・中南米での実践、そして日本の政策広報や文化交流等を通じたソフトパワー外交等、様々な仕事に取り組む機会を得ました。徹夜の交渉など肉体的にしんどかったことや、精神的なプレッシャーの下で仕事に取り組んだこともありましたが、「どうしてこんな仕事に就いてしまったのか」と後悔したことは幸い一度もありません。

外交の現場では、語学力や専門知識のみならず、国際情勢の流れを読み解く洞察力や刻々と変化する状況に的確に対応出来る柔軟性と瞬発力、相手側からの信頼と尊敬を勝ち取るようなコミュニケーション能力や人としての魅力など、まさに総合力が問われ、個々人レベルで日々の研鑽が求められます。でも、様々な難しい課題に立ち向かうのは一人ではありません。専門知識や経験を有する上司、同僚、後輩たちとチームとして取り組む中で、無理だと思っていた壁を乗り越えられたことは何度もあります。知的刺激にあふれ、自身も成長しながら、日本の外交を担う、そんな素晴らしい職場にチャレンジしてみませんか。

### 1988～1991年

■OECD環境委員会担当を経て、英国(オックスフォード大学)研修  
英国研修中、冷戦が終焉。外交官の責務を痛感

入省後はOECD環境委員会を担当。環境保護と経済活動との両立や日本の立ち位置等、悩みながら必死で取り組みました。オックスフォード大学研修中には冷戦が終結。友人とともにベルリンを訪れて崩れた壁を拾いながら歴史の転換点に立ち会う外交官としての責務に身が引き締まる思いがしました。

### 1991～1993年

■国連局経済課地球環境室(当時)

地球環境保全の軸となる2つの条約交渉を担当。  
国際的なルールづくりの難しさと醍醐味を体感

地球温暖化対策と生物多様性保護に向けた2つの条約作りを担当。国内関係者間の調整を経て、国際会議では徹夜で交渉に臨むこともしばしば。体力(特に持久力)と知力の限りを尽くした厳しい交渉を経て2条約が無事採択された時には各国交渉官たちと抱き合って喜びました。

### 2000～2003年

■在米国大使館(一等書記官)

ワシントンで日本をどう売り込むかに苦心した日々

同期の夫とともに赴任。広報文化担当として、2001年の同時多発テロを受けて、テロとの戦いに向けた日本の政策や文化・価値観をどうアピールするか試行錯誤しながら取り組みました。2003年に米国で出産、母となったことも人としての幅を広げることになりました。



第8回アフリカ開発会議(於:チュニジア)での海外メディアのインタビュー

### 2005～2009年

■国際協力局多国間協力課(当時)企画官、国別第二課長

現場の声に寄り添った、日本らしい援助の実施を目指す

分野別の援助方針の策定やODA白書編纂に携わった後、アフガニスタンやハイチ支援等に取り組みしました。現場を訪れ、現地の声に耳を傾けながら、日本の強みや経験を活かした支援に向けて、納得するまで調整を重ねました。かつて担当したバングラデシュの橋を15年ぶりに訪れ、人々の暮らしに役立っていることを実感し、感激したことも。

### 2012～2017年

■広報文化戦略課、総理官邸、国際交流基金、  
東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

様々なステージで日本の魅力発信に尽力

広報文化外交戦略課長として東日本大震災後の風評被害対策等に取り組みしました。官邸では、安倍政権の国際メディア向けスポークスパーソンとして総理の海外出張に同行(移動距離は地球6.2周)。国際交流基金での文化交流事業や日本語教育支援、組織委員会でのスポーツ外交など、様々な現場で日本の政策や魅力・強みなどの発信に努めました。

### 2017～2020年

■ASEAN代表部

ASEAN外交の最前線で、  
伝統的パートナーとしての日本をアピール

ASEAN代表部次席公使としてジャカルタに赴任。我が国の「自由で開かれたインド太平洋」への支持を働きかけたり、これまでの各国への日本のODAについての写真展や和食紹介イベントなどを仕掛けるなど、存在感を増すASEAN諸国との関係強化に取り組みしました。

### 2020～

■外務副報道官、内閣広報官を経て外務報道官に就任

再び広報の世界へ。内閣広報官を経て、  
外務報道官として外務省の情報発信を統括

広報文化交流分野でのこれまでの経験を活かし、海外における日本理解を促進し、良好な対日イメージや親近感を醸成するよう、日本の外交政策や政治、経済、社会、文化など幅広い分野について、SNSも駆使して、国内外での積極的な情報発信に取り組んでいます。



## これからの外交に必要なことは、 大局を見誤らない戦略的な発想と大胆な決断力



総合外交政策局長

市川 恵一

(1989年入省)

34年目

「自由で開かれたインド太平洋」構想、平和安全法制、TPP(CPTPP)、日米豪印、各国との経済連携協定など、日本が国際社会をリードすべく発揮してきたイニシアティブは様々です。こうした日本外交が目指すところは常に日本の安全と国民の繁栄に他なりません。そのために、日本の国益を、志を同じくする仲間の国々との共通の利益に、あるいは国際社会の共通益に昇華させて、それを確保するための国際ルールや枠組みを維持・強化する。数ある首脳・外相会談、G7やG20などの国際会議は、そのための大事な舞台装置です。それらの会談や会議を成功に導くため、事前に積み重ねられる国内外の関係者たちとの間の議論、情報交換、調整、交渉。これら全部が外交の醍醐味であり、我々の生き甲斐でもあり、自分を成長させてくれ

る糧でもある、そう思います。

しかも、1989年の冷戦終結から30年余りを経て、今や国際社会は再び混沌と対立の様相を強めています。これからの30年はこれまでよりずっと険しい時代になることでしょう。それ故、外交が決定的役割を担う時代が再び到来しているのです。今後の外交には、大局を見誤らず戦略的な発想のもと、場合によっては過去の延長線上に囚われない大胆な決断が必要です。それだけに、次の世代の皆さんが創意を持って意欲的に取り組むだけの価値のある新たな外交の地平が広がっているとも言えるのです。一人でも多くの前途有為な皆さんが外交に携わってくれることを期待しています。

## 1989～1992年

■入省～在外研修

### 歴史の転換点に入省する

入省した1989年は冷戦終結に続き、天安門事件が発生するなど、歴史の大きな転換点でした。その後のスペインでの在外研修のさなかに湾岸戦争が勃発。130億ドルもの支援をしながら、人的貢献ができない日本の対応について"too little, too late"などと批判されたことに、実に歯がゆい思いをしました。

## 1994～1996年

■防衛庁出向(防衛政策局運用課部員)

### 初めて「有事」を経験

防衛庁出向時代、生まれて初めて「有事」を経験しました。1995年の阪神淡路大震災です。フル稼働する自衛隊の災害救援活動に関する对外発信や国会対応などのため昼夜を分かたず働き、危機管理の重要性を痛感しました。その時に苦労を共にした防衛省の同僚たちとの絆は一生の財産です。

## 2000～2006年

■日米安全保障条約課首席事務官、在米国日本国大使館一等書記官

### 日米同盟の深化を実感

9.11同時多発テロ発生後の1年後にワシントンに赴任。「テロとの闘い」やイラク戦争には、日本も海上自衛隊の給油部隊をインド洋に、陸上自衛隊部隊をサマーワ(イラク)に派遣しましたが、国務省や国防省と重なる調整の中で、現場で肩を並べて協力することが如何に同盟を強くするかを実感しました。



日米首脳会談の前に日米両政府関係者で

## 2009～2010年

■大洋州課長

### 豪州、NZ、大洋州諸国へ1年間で15回出張

大洋州課長時代には、日豪ACSA(物品役務相互提供協定)交渉妥結とパプアニューギニアとの投資協定交渉開始の目途をつけるために何度も出張し、自分で課題を発掘して前に進める醍醐味を実感しました。日豪外務・防衛大臣会合でACSA署名に立ち会った時の達成感は忘れられません。

## 2011～2015年

■内閣官房長官秘書官

### 「官邸の司令塔機能」を知る

足掛け5年、政権交代をまたぎ3つの内閣に官房長官秘書官として仕えました。特に、東日本大震災や中東での邦人人質事件などの対応に当たり、官邸の司令塔としての機能の重要性を痛感。直面する難題に対し、政府としてぎりぎりの判断をする場に何度も立ち会うことができた経験はその後の大きな財産です。

## 2015～2020年

■総合外交政策局総務課長、在米国日本国大使館政務公使

### 外交戦略を考える

外務省に戻り、大きな視点からの外交戦略と総合的な政策調整を担当する課長に就任。在任中、「自由で開かれたインド太平洋」構想の立案に携わりました。その後、再び赴任したワシントンでは、AIなどの先端技術がパワーバランスに影響を与える時代を迎える中、オールジャパンで日米同盟の一層の進化に取り組みました。

## 2020年～

■北米局長、総合外交政策局長

### 再び歴史の転換点に立つ

北米局長時代、コロナ禍という難しい状況の中、菅総理のワシントン訪問やバイデン大統領の訪日を実現。2021年4月の日米首脳会談前夜、共同声明の内容を巡って米側と激しくやりあったことも、今から振り返れば良き思い出です。現在は、総合外交政策局長として、ポスト冷戦時代終焉後の日本の外交戦略を構想中です。



常に変化する世界を相手に、  
一瞬たりとも「飽きることのない人生」を送ってみませんか。



中東アフリカ局長

長岡 寛介

(1989年入省)

34年目

30数年前に外務省に入省した時、先輩に「外務省で働いていて、退屈な時は全然なかった」と言われたことを良く覚えています。その後のキャリアを振り返ったとき、その言葉が全く正しかったと痛感しています。私が入省したのは時代が昭和から平成に変わり、冷戦が終結するのと同じタイミングでした。アラビア語を専門言語としたこともあり、その後、多くの紛争に遭遇し、本省、在外公館それぞれで紛争への対応を経験しました。家を迫われ、日々の食事にも困る難民や国内避難民を助けるにはどうすれば良いか、そうした人々への日本の支援を迅速かつ効果的に届けるには何が必要か、現場の治安維持に当たっている米軍等の軍人との調整をどのように進めるのが良いか、政権に反抗する反体制派の人たちとの関係を構築するには

どうすべきか――いずれも予め正解が決まっているものではなく、一つ一つ、自分の頭で考え、同僚や上司と相談して答えを見つけていく必要があります。そのために私自身が重視しているのは、できる限り現場に赴いて、関係者の話を直接聞くということです。その際、私の存在＝日本ということ意識しつつも、同時に、常に相手の立場に寄り添うことにも意を用いてきました。外務省は他にも実に多様な課題に日々取り組んでいます。あなたも、こうした挑戦に立ち向かいながら、一度きりの人生をエンジョイしませんか。

## 1989～1995年

■入省～在外研修～在外勤務

## ダマスカスでのホームステイ

アラビア語の研修先としてシリアを選び、世界最古の街ともいわれるダマスカス旧市街でホームステイしました。入省するまでアラビア語に触れたことはなく、当初は日常会話にも苦労しましたが、2年間の在外研修を経て、通訳もできるくらいになりました。

## 2004年

■サマーワの外務省事務所

## 初めての軍隊生活

自衛隊がイラク南部のサマーワに派遣されるに当たり、外務省チームの初代No.2として約1.5ヶ月「軍隊生活」を送りました。オランダ軍の宿営地に間借りをしつつ、砂嵐のために東京との連絡に苦労したのを覚えています。

## 2005～2007年

■在イスラエル大使館参事官

## 首脳訪問と戦争

2006年、小泉首相の訪問直前、イスラエルとヒズボラの戦闘が始まりました。国家の非常事態にもかかわらず、イスラエル側がしっかりとおもてなしをしてくれたことに、常に戦争状態にある国の生き様を見た気がします。



パスラ上水施設の視察

## 2007～2009年

■在イラク大使館公使参事官

## イラクへの初のビジネス・ミッション

治安状況は良くなかったですが、初めての日本企業幹部によるミッションの受入れを行いました。僅か1日の短い滞在でしたが、援助からビジネスへという、新たな関係の構築に向けて貢献できたのは良い思い出です。

## 2011～2013年

■中東第一課長

## 『アラブの春』後の中東外交

シリアでの内戦において、反体制派との関係構築や国連を介さない支援の検討等、これまでになく課題に直面しました。トルコ国境の難民キャンプを訪れたり、日本の存在感を発揮すべく東京で国際会議を主催するなど積極的に取り組んだことは貴重な経験となりました。

## 2013～2015年

■在イラク大使

## 『イスラム国』からの復興を支援

2014年、「イスラム国」がイラク西部・北部を支配し、再びイラクの状況が悪化しました。国内避難民への緊急支援を行うとともに、「イスラム国」の支配を脱した地域の復興を支えるための支援を検討しました。

## 2021年～

■中東アフリカ局長

## アフガニスタンの人々に寄り添う支援

2021年、タリバーンが復権した後のアフガニстанは大きな困難に直面しています。タリバーンを承認せずに、一般のアフガン人を効果的に支援するにはどうすべきか。タリバーン幹部に国際社会の考えを伝え、理解してもらうには何が必要か、難しい課題に国連や有志国との議論が続けています。



「ポスト冷戦時代の終わり」の先へ  
歴史の激動の中で国の針路を定める仕事

欧州局ロシア課長

山田 欣幸

(1995年入省)

ロシアがウクライナに侵攻し、国際社会は大きな挑戦を受けています。海外経験もなかった私が外務省を志望したのは、学生の頃目の当たりにしたベルリンの壁崩壊、冷戦の終了、ソ連崩壊に、歴史のダイナミズムを感じたからです。見るだけでなく、直にその中で仕事をしたい。この希望は、入省後20有余年、十分に叶えられていると実感しています。今世界は、その頃以来の歴史の激動に直面していると言っても過言ではありません。ロシア課長として、後世に恥じないよう、経験と知識を総動員して、外交政策の立案に当たる日々です。日本の針路を我々の手で切り開く仕事に共に取り組んでくれる方が、大勢外務省を志してくれることを期待しています。



2001～2004年、2010～2012年

■欧州局ロシア課課長補佐、在ロシア大使館参事官

これまで東京2回、モスクワ2回、ロシアと仕事

領土問題はもちろん、歴史の節目で常にロシアは日本に大きな影響を投げかけます。対露外交を支える基礎を養いました。

2006～2008年

■国際協力局政策課課長補佐

途上国だけでなく日本の国益にも貢献するODA

日本外交随一のツールをサステナブルに実施していくために苦労したのは、このことを大勢の人に実感していただくことでした。



G7首脳会合でウクライナ情勢について議論(提供:内閣広報室)

28年目

2012～2014年

■在米国大使館参事官(広報文化担当)

ワシントンの世論は政策に直結

米国世論と対日理解は日本外交に直結します。広報イベントへの反響が大きかった時の手応えはひとしおでした。

2016～2019年

■内閣官房国家安全保障局企画官(出向)

大げさでなく、「国家百年の計」を見据えて

日本の安全保障の課題を一つ一つ克服し将来につなげていく仕事を通じて、自分自身の視野の広がりも実感しました。

2019～2021年

■南部アジア部南東アジア第一課長

メコンの活力と日本の知見でウィン・ウィンに

「これをやればお互いの利益」という可能性の宝庫から政策を実現していく。ミャンマーのクーデターが心残りです。

国際情勢が大きく変化する中において  
日本外交の進路を考え、国際社会を主導する

在韓国大使館 公使

山本 文土

(1995年入省)

「ミサイル発射！」 第一報とともに、スーツに着替え、官邸に向かい、官房長官会見の準備をする。。。これは残念ながら、映画の話ではなく、私が官房長官の秘書官をしていた時に実際に何度もあった話です。度重なるミサイル発射、隣国への侵攻、一方的な現状変更の試み。日本を取り巻く安全保障環境はこれまで以上に厳しさを増しています。また、国連の安保理では拒否権が行使されるなど、国際社会の意思決定のあり方も本質から問われています。このような中、我々外交官は、これまで以上に、日本の進むべき方向性を決め、世界をリードしていくことが求められます。非常にタフな仕事ですが、やりがいも大きいです。ともに進んでいきましょう！



2008～2011年、2022年～

■在韓国大使館公使、北東アジア課首席事務官

現場と本省で、朝鮮半島問題を担当

本省で朝鮮半島を担当した経験をいかし、ソウルで政務担当公使として日韓関係と北朝鮮を担当しています。

2011～2014年

■国際連合日本政府代表部参事官(国連予算担当)

英語と仏語で日本の存在をアピール

英語と仏語を駆使し、徹夜で国連予算交渉を行いました。当時の各国外交官との友情は今でも貴重な財産です。



2014～2017年、2020～2022年

■官房副長官秘書官、官房長官秘書官

総理官邸の中枢で政治と外交の接点を経験

総理官邸で毎日の記者会見を含め、政治と外交の接点を経験しました。総理との海外出張も良い思い出です。

2017～2019年

■国際協力局開発協力総括課長

FOIPを戦略的な観点から実施

「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向け、開発協力政策の責任者として戦略的な援助を実施しました。

2019～2020年

■アジア大洋州局地域政策参事官

HASEAN首脳会議・日中韓首脳会議開催

「ASEAN感染症対策センター」を20年3月の特別サミットで日本のイニシアティブで立ち上げました。



経験と挑戦で外交の地平を切り拓く  
悩みの中で答えを見つけ、付加価値を加える

26年目

南部アジア部南東アジア第二課長

太田 学

(1997年入省)

海外旅行すら行ったことがないけれど、歴史と国際情勢に関心を持ち続けてきた学生でした。そんな私ですが、入省後の約25年間で、国際法、地域外交、安全保障政策と幅広い業務を担当してきました。その一つ一つがその時々の仕事に活かされ、今、担当している東南アジア各国との外交にも大事な視点を与えてくれています。何が正解なのか容易には分からず、歴史がそれを検証する、そんな外交の世界を切り拓く力は、飽くなき挑戦の積み重ねなのではないかと思います。外務省はそんな経験・出会いと挑戦の場を常に与えてくれる職場です。外交は生身の人間が向かい合っていくものです。だからこそ「違い」が生み出せるのだと信じて毎日励んでいます。



1997～2005年

■在外研修、在外勤務、アジア大洋州局北東アジア課

外交官の基礎を学び、厳しい現場に飛び込む

在外研修、北京での勤務の後、北朝鮮班員として小泉総理の訪朝や六者会合の立ち上げなどに携わりました。

2005～2012年

■国際法局条約課、アジア大洋州局中国モンゴル課、総合外交政策局総務課(課長補佐)

必死に学びながら駆け抜けた課長補佐時代

ICC規程締結、東シナ海ガス田交渉、日中関係、東日本大震災時の外交など、各ポジションで苦闘しました。



日インドネシア首脳会談(提供:内閣広報室)

2012～2016年

■北米局北米第一課(首席事務官)、総理官邸(官房副長官秘書官)

マネージメントと総理官邸からの新たな視点

日米関係のマネージメントと共に、官邸では政府全体としての政策決定のダイナミズムに秘書官として携わりました。

2016～2019年

■在米国大使館(参事官)

トランプ政権との外交の最前線へ

未知のトランプ政権との人脈構築に励み、日米同盟の深化に米国NSC、国務省等の同僚達と取り組みました。

2019～2022年

■国家安全保障局(内閣参事官)

「安全保障の司令塔」での緊張感と出会い

日本の安保環境の変化の中、国益のために省庁の壁を乗り越えて取り組む毎日を緊張感を持って過ごしました。

政策の一端を担う実感がやりがいとなり、  
自信と成長につながってより大きな仕事へ

23年目

国際法局社会条約官

久賀 百合子

(2000年入省)

外交はあらゆる分野で幅広く世界を相手にしているため、小さな仕事でも一人一人の創造力、行動力によって成果が変わることを体感できます。いざというときに日本のことを聞いてくれるかどうかは、世界にいる外交官の人脈形成にかかっていますし、国際会議での発言、首脳声明や条約について、若手省員が工夫を凝らした提案が解決策となり、日本に対する信頼が増すこともあります。先輩からも学ぶことで知識と経験を積み重ね、考え方が異なる相手を説得するコミュニケーション能力を磨いた上で味わえる達成感ですが、味を占めると、その自信によって、さらに大きな仕事に挑むことができるので、成長しながら常に新しい目標を目指す職業です。



2004～2006年

■在米国大使館

新人の外交官だって日本国民のために奮闘

米国の対テロ対策により新型旅券の導入が短期間で求められた中、産業界とタグを組んで議会を説得しました。期限延長に成功し、日本人への不利益を阻止しました。

2009～2010年

■総合外交政策局総務課

イタリアに10回出張、美味しいパスタの味も忘れられない

G8議長国の各地で行われた会議で、イランやアフガニスタンに対する日本独自の貢献策や、北朝鮮問題を理解してもらう重要性を体感しました。



日・米宇宙協力に関する枠組協定の交渉(2022年6月)@ワシントンDC

2011～2013年

■国際法局国際法課

国を背負う気持ちから、時間を忘れて打ち込んだやりがい

韓国の大統領が竹島に上陸したことに対し、国際司法裁判所に提訴するための訴状を作成しました。この頃、多くの外相会談、首脳会談の通訳官も務めました。

2013～2014年

■国家安全保障局に出向

他省庁の同僚と切磋琢磨し、安全保障の法制度の根幹に迫る

日本の平和及び安全のため自衛隊がなすべきことは何か、外国の軍隊への協力はどこまで可能か等、議論を重ね、平和安全法制の土台づくりに携わりました。

2021年～

■国際法局社会条約官

日本の義務を決める条約をつくることは後世に残る使命

その後、在外公館勤務やマネジメント業務担当を経て、2度目の国際法局で宇宙、航空、環境、人権などの分野の条約の交渉、締結の責任を負っています。



# 官邸／内閣官房で活躍する外務省職員たち



## 内閣官房副長官補 兼 国家安全保障局次長 岡野 正敬

1987年 入省  
1990年 在フランス大使館 三等書記官  
2001年 在中国大使館 一等書記官、参事官  
2010年 欧州局ロシア課長  
2015年 在米国大使館 公使  
2019年 国際法局長  
2021年 総合外交政策局長  
2022年 現職

## 外交の基本はどこでも同じ：想像力・共感力、聞いてもらう力、そして日本のファンを作ること

### 総理官邸での外交

私は現在、外務省を離れ、内閣官房副長官補として総理官邸にて勤務しています。国家の中枢である総理官邸には独特の緊張感が漂いますが、その中で主たる任務は、外交政策に関して総理大臣と官房長官を補佐すること、内閣の重要政策の企画や立案、総合調整をすることです。国際政治の流れの多くは首脳外交により決まります。日本の国益を拡大し、国際社会の平和と繁栄に貢献するためには、総理の強いリーダーシップが求められ、それを支える関係省庁の英知の結集と世論の力強い支持が重要です。

外交は中長期的な営為であり、政治は選挙を睨んだ短期的な営為であるとも言われます。政治と行政の結節点である官邸では常にそのバランスが問われます。不都合な真実も避けることなく提示し、政策オプションをメリットとデメリットをあわせて総理や官房長官に提示する必要があります。外交のプロの目から見て当然こうあるべきではないかと思われる外交政策も、政治プロセスの理解を得なければ政策になりません。政府の意思決定、そして国内のコンセンサス作りをいかに行うか、これを考えるのも我々の仕事です。2022年末に閣議決定された国家安全保障戦略の改定では、正にそのような粘り強い作業が求められました。

### 外交官の基本

外交官として必要な素養は何でしょうか。外務省員に聞

けば百人百様の答えが返ってくるでしょう。35年間の外交官人生を経て私が重要だと考えるのは、第一に、想像力と共感力です。相手の置かれた状況を想像し、相手の立場になって考えてみることは相手に同情、同調することとは異なります。相手の主張を、相手の社会、文化、歴史という文脈に照らして理解すること、それがコミュニケーションの出発点です。

第二に、聞いてもらう力です。発信力だけでは不十分です。こちらが正しいと思うことを言っても、相手が納得しなければ何なりません。聞いてもらう力を高めるためには、語学力やプレゼンテーション能力も勿論必要ですが、最後の決め手は「この人の言うことなら大丈夫だ」と信頼してもらえる人間性ですから、人としての魅力を日々磨くことが大切です。こうして一人でも多くの日本ファンを作っていくこと、地味な作業のように思われるかもしれませんが、これが外交官の基本的ミッションだと考えます。現在国家の中枢で外交に携わる立場にあっても、常にこうした基本に立ち返ることを心掛けています。



日ルクセンブルク首脳会談への同席（2022年10月、官邸にて）



## 国家安全保障局 内閣参事官 長谷部 潤

1999年 入省  
2013年 国際法局条約課 首席事務官  
2015年 国際連合日本政府代表部 参事官  
2018年 大臣官房人事課 首席事務官（後に企画官、人事企画室長）  
2021年 南部アジア部南西アジア課長  
2022年 現職

## 国家安全保障の司令塔として国益を考える責任と醍醐味

### 国のために 総力を結集する

国家安全保障局（NSS）は、国家安全保障に関する基本方針や重要政策の企画・立案・総合調整を担っています。省庁間にまたがる案件では、霞が関の司令塔として、縦割りを排し、政府一丸となった「オール・ジャパン」な取組を積極的に主導していかなければなりません。

私はここで、中国、朝鮮半島、ロシア等を担当するチームの長を務めています。中国のもたらす「これまでにない最大の戦略的な挑戦」、前例のない頻度で弾道ミサイルの発射等の挑発を繰り返す北朝鮮、国際秩序の根幹を揺るがすロシアによるウクライナ侵略……。政府全体で情報を集約・分析し、足並みをしっかりと揃えて取り組むべき課題は尽きません。

私のチームには、若手外交官の他、自衛官や海上保安官を含め関係省庁からも精鋭が集い、各人の強みが、チームに多角的な視点と厚みをもたらしています。同僚たちの現場感覚や専門性、そして自身の強みである外交や国際法に関する知見を総動員しながら、国家全体としてなすべきことを考え、省庁間の連携を確保して政府の総力を結集することが、チームを率いる私の仕事です。

### 国を背負いながら 挑戦と成長を続ける

世界のパワーバランスが変化し、地域の安全保障環境が一層厳しさを増す中で、日本の安全に影響を及ぼす周

辺地域の動向を注視しつつ、同盟国である米国等ともしっかりと連携しながら、抑止と備えに万全を期し、いざというときには迅速に断固たる対応を行っていく。NSSでの仕事は、先見性や企画・立案力、適時適切かつ冷静な判断力と胆力、統率力や調整力といった自分自身の能力を日々極限まで試されます。緊張の連続を伴う重責ですが、同時に、省庁の枠を超えて、国家のために必要なことは何か、それを実現するための手段は何か、「同じ釜の飯を食う」同僚たちと共に真剣に考えることのできる仕事であり、大きなやりがいを感じています。

外交官は、国家と国益のことを常に考える仕事であり、その経験は、NSSでも確実に活かしています。重要な外交政策の企画・立案・調整、二国間や多国間の国益をかけた交渉、複雑な国際法上の判断等といった、これまで外務本省や在外公館での仕事を通じて培ってきた経験こそが、現在の職務を務める上でも自分自身のかけがえのない糧と強みになっています。



日米韓の3か国協議の前に（2022年8月、米国ホワイトハウスにて）



# 「人」を育てる研修制度

## 在外研修員の声



在ミュンヘン総領事館 領事官補

二村 卓秀

2019年 入省  
欧州局中・東欧課 事務官  
2021年 現職

## 夢と矜持をもってさらなる高みへ

現在、ドイツ最古の大学ともいわれるハイデルベルク大学にて逐次・同時通訳の訓練に励んでいます。研修言語決定後、ゼロから学び始めた独語ですが、授業で通訳ブースに入るたび、「いつか通訳業務に携わりたい」という当初の夢に一歩ずつ近づけていることに高揚感を覚えます。

もちろん語学だけでなく文化的理解を深めることも重要です。実務研修時代はオーストリア担当として、首脳電話会談や先方大使との意見交換等に携わりましたが、ドイツ留学を経て、独語圏の中でも文化や国民性の面で多様性がみられることに気づかされました。

さらに歴史的洞察も欠かせません。渡独1年目はミュン

ヘン大学にて歴史や政治を学びましたが、戦後の日独の歩みには共通点があれば相違点もあります。そうした事実関係を押さえた上で、国際場裡にて日本の名誉を守り抜ける外交官となるべく、今後ともさらなる高みを目指していく所存です。



在エジプト大使館 外交官補

堀 千香子

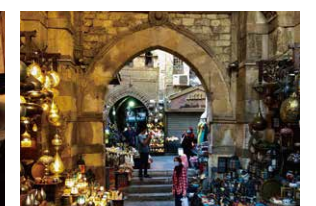
2019年 入省  
中東第二課 事務官  
2021年 現職

## 言語を通して相手を知る

2年間のアラビア語研修のためエジプトの首都カイロで生活しています。1年目は現地の大学で、2年目の今は家庭教師とマンツーマンでアラビア語のより細やかな向上に尽くしています。

エジプトでアラビア語を勉強し始めて、いかにアラビア語がアラブ人の重要なアイデンティティを構成しているかを身に染みて感じます。現地での生きたアラビア語学習は、コミュニケーションツールとしてのアラビア語を超えて、アラブ人とはどのような人たちなのかそのものを学ばせてくれます。アラビア語を基礎とするこの文化圏は、多くの日本人にとってはどうしてもなじみが薄く、彼らの行動・思考

様式は多くのことで異なっています。だからこそ、この研修を通して彼らへの理解への第一歩となるアラビア語を極めると同時に、純粋な眼で見聞し誠実な態度で向き合うことで、外交官として必要な相手への理解を作っていけたらと思います。





# ワークライフバランス実現に向けた取組



## 子育てと仕事、 試行錯誤で見える景色

経済局国際経済課・欧州連合経済室 首席事務官

### 三好 あさぎ

2008年 入省  
2016年 南部アジア部南東アジア第一課 課長補佐  
2018年 大臣官房総務課 課長補佐  
2019年 中東アフリカ局中東第一課 課長補佐  
2022年 現職

私は入省6年目に長男を授かり、何かと忙しくなりがちな課長補佐時期を「子連れ」で過ごしてきました。平日はシッターさんを頼み、夫と分担して週の半分は要すれば残業に対応し、子供が保育園児の間は出張時は実家に預けて・・という日々でした（現在は次男も加わり更に賑やかです！）。仕事はなるべく効率的に、と意識し、幸い、上司や同僚にも理解をいただいていたと思います。私生活と仕事の関係は省員それぞれですが、最近では年齢や性別を問わず様々な例があるように感じます。この多様な世界で、奥行きのある外交を行うためには、多様な人材の知見や能力を活かすことが重要ですし、私としてもこれまで周りに支えてもらっている分、少しでもそうした職場作りに貢献できればと思っています。



## フランス外務省の 友人達から学んで

大臣官房会計課 課長補佐

### 和田 敦朗

2009年 入省  
2015年 総合外交政策局国連政策課 課長補佐  
2017年 内閣官房副長官補室 出向  
2019年 北米局北米第二課 課長補佐  
2021年 現職

「バカンス大国フランス」での勤務を通じ、家庭やプライベートを大切に、人生を楽しみながら活躍するフランス人外交官の姿を見てきました。今は共働きの妻と、3人の子育て中。出産立会い、育児休暇、保育園への送り迎え、料理、掃除等に取り組んできました。

外務省や霞ヶ関のワークライフバランスは道半ばです。でもそれぞれの専門地域で、人々の生活の営みや世界観に触れ、感化され、日本でも試行錯誤する同僚が多いのが外務省の強みです。

私が入省した14年前の働き方は、もはや隔世の感があります。次の10年はさらに変わっていくでしょう。私自身も外務省でのテレワーク推進やオフィス改革に多くの有志メンバーと取り組んでいます。ぜひ仲間に加わっていただきたいと思っています。



## 若手の声が原動力

大臣官房官房総務課 課長補佐

### 小金 修

2011年 入省  
2016年 在ロシア大使館 二等書記官  
2018年 外務報道官・広報文化組織広報文化外交戦略課 主査  
2020年 軍縮不拡散・科学部軍備管理軍縮課 課長補佐  
2022年 現職

最近、働き方、人間関係、組織やキャリアパスの在り方などについて後輩たちと話すことがよくあります。そのいずれにおいても改善しなければいけない課題はあります。しかし、私が後輩達にいうのは、「自分が組織の不条理に出会った時、組織を「替えよう」とは思わず、組織を「変えよう」と思う。それは、この組織の担っているミッションに対する確信が揺らがないからだ。」ということです。

外務省を志す皆さん、特に総合職を志す皆さんには、将来の日本外務省、そして日本外交は自分たちにかかっている、と

思っていたいだきたいと思います。省内の雰囲気は最近明らかに変わってきています。森次官も「若者に声を上げてほしい」と口癖のように言っています。オフィス改革やテレワーク推進を含め、ここでは書ききれない様々な全省的な取組が、若手の声を原動力にする形で行われています。

外務省での仕事は全てがバラ色というわけではありませんが、一緒に、外務省という組織を進化させ、日本の外交を盛り立てていく、そういう思いを持った仲間が外務省の門を叩いてくれることを期待しています。

## ワークライフバランス実現や業務合理化のための様々な制度・取組

育児休業

育児時間・育児短時間勤務制度

早出遅出勤務制度

海外勤務にかかる人事上の工夫

テレワークの推進

配偶者出産休暇

男性職員の育児参加のための休暇

一人一台モバイルPC導入

AI翻訳の活用

電子決裁・電子的文書管理の推進

メンター制度の拡充

オフィス改革、テレベース設置



取組の概要はこちらから▶





# Round-Table Talk

2021年に入省した4名の若手職員の座談会から、外務省の仕事のやりがいや魅力、学生の皆さんへのメッセージを伺いました。

# 若手職員座談会

北米局北米第一課 事務官  
**太谷 慧** (2021年入省)

総合外交政策局人権人道課 事務官  
**村上 日奈** (2021年入省)

国際法局国際法課 事務官  
**坂本 友希** (2021年入省)

外務報道官・広報文化組織 広報文化外交戦略課 事務官  
**岸仲 真裕** (2021年入省)

Q 外務省を志したきっかけを教えてください。

(太谷)「失われた20年」を通じて育つ中で、将来の日本のプレゼンス、そして平和と繁栄に問題意識があり、その確保に日本を俯瞰する高い視座と様々な地域・分野を所掌する広い視野をもって取り組むべく、外務省を志望しました。また地方出身者として、自分の人生の時間軸・空間軸をもっと広げていきたいという思いが常にあり、その点でも外交に魅かれました。

(坂本)国際情勢に関心があり、国際社会を形作る過程に携わりたいと考えたことがきっかけです。また、国際法を学ぶ中で、関係国の有する多様な利害を考慮し、様々な外交上のツールを用いながら着地点を見つける過程に当事者として関わりたいと考え、外務省を志望しました。

(岸仲)坂本さんと同じく国際関係を学ぶ中で、ジャーナリストのような第三者的視点ではなく、歴史の当事者として外交官でなければ知り得ない世界を垣間見て、国際情勢の最前線に立てるのなら面白いんじゃないか、と考えました。

(村上)私の場合は、もともと持っていた言語学習への興味、さらに外国の友人との交流などをきっかけに、国籍を超えて個人間で紡ぐことができる友情を国家間のレベルに昇華したいと思うようになり、良好な国家間関係の維持・発展に貢献できる場として外務省を志しました。

Q 現在どのような業務に携わっていますか

(岸仲)外国の国民や世論に直接働きかける「パブリック・ディプロマシー」という外交ジャンルに携わっています。広報の世界には、「知られてないことは存在しないのと同じ」という格言があります。国際社会では、様々な国・組織・個

人が、それぞれの立場や狙いから広報文化戦略を実行している中、日本の取組や立場、更には文化などが「存在しないのと同じ」になったり、誤って受け取られたりしないよう、戦略的な対外発信を日々検討しています。伝統的な外交とは大きく毛色の異なる分野ですが、今、大注目の分野で得がたい経験を積んでいます。

(坂本)私が所属している国際法課では、外交上の諸課題に存在する国際法上の論点を検討したり、ハイレベルの会談等に際して作成される成果文書等でどのような文言を盛り込むことが、日本の問題意識を同志国と共有することにつながり、ひいては日本の望む政策の実現に資するかを検討したりしています。学生時代に勉強してきた学問としての国際法とは異なり、国際法の発展の過程に関与できることは、実務家として国際法に携わる魅力だと感じています。

(村上)私は人権人道課に所属し、人権・人道に関する外交政策に携わっています。人権諸条約の政府報告審査対応もその一つで、自由権規約委員会による政府報告審査の際には、日本政府代表団の一員としてジュネーブ出張し、審査に参加しました。自由権規約は日本が締結している人権条約の中でも特に扱う内容が幅広く、審査の場ではあらゆる分野での政府の取組について問われます。人権問題の複雑さや多様さ、現場で関係者と協力しながら適切に立場を発信していくという緊張感を肌で感じることができました。

(太谷)米国とカナダを扱う部署で、両国との関係の総合調整を行っています。これまでの2年弱の勤務においては、バイデン大統領の訪日に現場での接遇を含めて従事したり、岸田総理や林大臣の訪米に同行したり、カナダの外相の訪日に際してリエゾンを務めたりと、大きな外交舞台にいくつも立ち会いました。その一つ一つが忘れがたい思い出で

あるとともに、二国間外交の基本形態である要人往来を通じて外務省員としての基礎を学ぶ貴重な経験になりました。

Q 職場の雰囲気はどうか。

(太谷)皆さんとても優しく、チームワークがあります。また上司からは、例えば失敗しても、自分達がカバーするので、勉強になったと思える体験を少しでも多くしていったほしいと日頃から言われており、挑戦を温かく促してくれる職場だと感じています。

(村上)私の課も雰囲気はとても良いです。仕事が忙しくて大変なときはありますが、そのようなときも同じ課の人に色々相談したり、時には雑談をしたりしながら過ごせており、周囲の人に恵まれたなとありがたく思っています。

Q 勉強されている研修言語の魅力があれば教えてください！

(岸仲)語学を学ぶことは、すなわち文化を学ぶことです。私はアラビア語研修の職員ですが、善くも悪くもイスラム文化は、西欧文化とは根本から異なっています。異文化を学び、翻って我々自身も自問しつつ共存の方途を探求していくところ、この職業の醍醐味だと思っています。

(坂本)私はロシア語研修ですが、昨今の国際情勢を踏まえると対露関係の重要性は増しており、こうした時代に外務省でロシア語を専門にできることの意義を実感しています。ロシア語に限った話ではないと思いますが、新しい言語を学びながらその国の文化や思想を垣間見ることができることにワクワクしますし、今後のキャリアの中でその国に深く関わる可能性があると考え、語学を学ぶ励みになっています。

Q 今後のキャリアを考えている学生の皆さんにアドバイスやメッセージをお願いします！

(岸仲)進路選択や社会に出た後など、先の不安はし始めると切りがありません。昔から「来年のことを言うと鬼が笑う」と言いますし、あまり取り付かれすぎず、その瞬間瞬間の思いや環境を大切に、今だからこそこできることを存分に堪能してください！

(坂本)自分が就活生だった時を振り返ると、インプットし、それを自分の中で噛み砕いて考える時間を持つことが大切だったと思います。就活の機会でなければ話を聞く機会がない業界も多いと思いますので、色々な業界の話を聞いて吸収しながら、自分自身を振り返ることにつなげていっていただければ、悔いのない将来が選べるのではないかと考えています。

(村上)義務感に駆られて「これをやらなきゃ」となるのではなく、素直に今、自分が何をしたいのか、何を学んで何になりたいのかというのを突き詰めて考えて、正直に動いたらいいのではないかと感じます。周囲の人の話もたくさん聞きながら自分の中で考え尽くすことで、自ずと自分の軸や方向性が固まってくるのだらうと思います。

(太谷)僕も、とにかく色々な人の話を聞いたら良いと思います。実際にそのキャリアに就いている人達からそれぞれの仕事の何に面白さや誇りを感じているのか聞き、自分が将来その人と同じことを言いたいと考えるかどうかは、一つの大事な決め手となるはずです。



## 採用 Q & A

### Q1 どのような人材が求められていますか？

A 厳しい国際社会の中で日本の利益を追求していくため、(1)国民のために働きたいという強い意志と責任感を持つこと、(2)未知の課題に積極的に取り組むチャレンジ精神を持つこと、(3)冷静に考え、かつ、機動的に動くことができることが求められています。

### Q2 英語ができないと外務省には入れないのでしょうか？

A 採用選考は学力、適性等を総合的に勘案し、人物本位で行っています。外務省総合職職員として活躍するために英語力は重要ですので、外務省としては、官庁訪問の際に、TOEFL又はIELTSのスコアを提出することを推奨しています。優れたスコアは一定の語学能力を示すものとして評価されます。他方、英語力によって採用の可否を決めることはありません。外務省は多様な人物を求めており、受験時の語学力が不十分であっても、高い能力と意欲が評価されて採用され、入省後に語学力と外交官としての素養を得て活躍している職員も少なくありません。なお、英語以外に得意言語があれば、当該語学の公的な語学試験のスコアの提出を推奨しています。

### Q3 留学経験・海外生活経験がないのですが、採用されますか？

A 採用選考は学力、適性等を総合的に勘案し、人物本位で行っています。留学経験・海外生活経験については、その経験を通して何を会得したかが重要であり、経験の有無により採用の可否を判断することはありません。なお、外務省では、採用後、本省での研修及び勤務を経て2～3年間の在外語学研修の機会が与えられます。この研修の機会に高いレベルの語学力を習得し、かつ、外交官としての素養を学ぶことが求められます。

### Q4 理系区分でも採用されますか？

A 外務省は、その業務が多岐にわたることから、多様な人材を求めており、国家総合職試験の区分にとらわれず、人物本位で採用選考を行っています。どの区分の合格者も、官庁訪問において、面接等を通じた採用を行っています。

### Q5 配属や転勤の希望はありますか？

A 本人の能力、適性、希望等を総合的に考慮し、配属先が決定されます。概ね2～3年ごとに配属先が変わりますので、様々な仕事を通して多くの知識や経験を得る機会があります。

### Q6 海外勤務はどれくらい続きますか？

A 新規採用者は、本省での2年間の研修を終えたのち、研修言語を履修するのに適した国の大学、大学院などで2～3年間の研修を行います。研修終了後はそのまま在外公館で勤務する場合があります。その後はおおむね2～3年ごとに異動があり、本省と在外公館を一定期間ごとに繰り返して勤務するのが一般的です。

### Q7 育児と両立できますか？

A 育児休業、時短勤務、フレックスタイム制、テレワークなどの各種制度を積極的に活用しやすい雰囲気が醸成されていますので、育児を行いつつ能力を発揮しつつ活躍することが期待されています。外務省専門職員については、原則として、40 数言語の中の一つが研修言語として指定されます。

## 外務省では、総合職のほかに専門職・一般職等の採用を行っています。

### 外務省専門職員

高い語学力を有し、関連する国・地域、あるいは条約、経済、経済協力、軍縮、広報文化などの分野の業務を通じて実践的な知見を深め、その経験に基づく能力を発揮しつつ活躍することが期待されています。外務省専門職員については、原則として、40 数言語の中の一つが研修言語として指定されます。

### 一般職職員

会計、文書管理、通信事務、領事事務、在外公館施設管理などの業務を通し、国内外で、日本の外交を力強く支えています。

外務省採用情報ページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/saiyo/>

外務省(学生向け)Twitter [https://twitter.com/Mofa\\_student](https://twitter.com/Mofa_student)

外務省(学生向け)Facebook <https://www.facebook.com/Mofa.student/>

採用情報



Twitter



Facebook



# 時代を画する 変化の中にある世界で、 後世に 何を遺すか

「国と国の関係」は、各国の外交官たちによる

いくつもの「人と人の関係」が織りなすものです。

そして、私たち外務省職員一人ひとは、

大きく激動する国際社会という舞台で、国益を守り抜き、

平和で安全な国際社会の維持に寄与すべく、

その全人格を以て日本を体現しています。

複雑な世界の動向を見極めながらその時々々の課題に取り組み、

歴史を重ね、いかなる日本と世界を未来に遺すべきかを考え抜く

—それは単なる「国際的な仕事」という枠には収まらない

魅力と挑戦に溢れる、一つの「生き方」です。

日本と国際社会のために力を尽くしたい、

新たな出会いを大切に未知の課題にチャレンジし続けたい、

そんな想いを抱く方々と一緒に

未来の日本外交を担うことを楽しみにしています。

外務省採用担当一同